

場の写真を相互に送り確認することになっている。

今後もうこうした試みを通じ、さらに多くの海外関連学会と交流が重ねられることを期待したい。

(真柳 誠)

近藤均氏《紹介》『ヴェサリウス著…

人体構造論抄…中原訳』（本誌四〇巻第四号）に寄せて

著書に対する書評はあっても書評に対する書評というのはあまり聞いたことがない。しかし今回本誌四〇巻第四号に寄せられた近藤均氏による中原訳『人体構造論抄—ヴェサリウスの the Eptome』の《紹介》記事に関しては実に読後感の悪い悲しい気持ちになり、いたたまれずして筆をとらせて頂いた。同じ歴史に興味を持つ者としてこの様な「事件」が誌面の片隅にせよ生じたことは残念である。

正面きつてのしかも、学術的構えでもつての徹底的な非難は正直言つて驚いた。確かに言評のどの一点についても反論の余地はないだろう。氏の言われるとおり誤訳はあつてならぬ事である。これを達成するにはその分野におけるそれなりの学識と経験が要求されるであろう。つまりはその分野で学識と経験のないものは翻訳に手を出すという事になる。これは正しい。ヴェサリウスの翻訳をなさんと欲するものは言語に堪能にかつ人体解剖の学識並びに臨床ないし遺体解剖の経験を踏み、なお歴史的展望を持つ者のみこそが当たる

べきであろう。実に正論である。しかし、ではそのような人物が日本にいるのか？

ヴェサリウスの翻訳に限らず古今の第一級古典はぜひ邦語訳が望まれるが、その翻訳は本来であれば上記の資格を備えた人のみがあたらねばならぬであろう。しかし、そのような条件を備えた人を持てば、適格者がいたとしても実に百年に一人の人材ではないか。正論故に反論せずとありたいところであるが、正論であるにも関わらず胸につかえるところがあるのはこの点の故であろう。

「翻訳の使命とその限界」は文化の輸入国日本においては重要な課題であつたし、今後もまた有り続けるであろう。「翻訳論」という分野があるくらいである。中でも翻訳における誤訳の問題は技術的にも哲学的にも根は深い。詰まるところ、それは翻訳の現実の中での効果効用に行き着くのである。誤訳がどの程度の弊害を生じるかという現実論を考えた場合、結局はどのような誤訳部分なのか、またその文献をどのような人がどのような目的で利用するかに懸かっているであろう。解剖学的事項を詳細に研究する人々にとっては解剖学的事項の誤訳は大きな弊害であろうし、文化史的に大局を論じたい人には目も通さぬ所かも知れぬ。そして、その目的によつては弊害の大きい人々にあつてもその専門レベルに依じてその翻訳のみを唯一の根拠にする事もないであろうから、実害は少なからう。問題は原典もしくは他国語の翻訳文献にまで遡及できない人々への弊害であろうが、これまた受取手の

問題なのであつて基本的にはへ原典以外は一切を信ぜずへが信条であるべきだろう。それほどに翻訳は本来信頼のできるものではない。

例えば翻訳語「医学」はへ学への字故にすぎに medicine ではない。医学ではなく medicine の語を用いるにせよ、現在の medicine の概念で語ることでできる医学はせいぜいここ二一三〇〇年のことであろう。現代の日本語に翻訳するだけで意味が変化してしまうのである。

「テキスト（権威と伝統）ではなく、あなたの見たもの、あなたの触れたものを信じなさい」はヴェサリウスの言葉である。「原点に戻れ」と叫ぶヴェサリウスにたいして彼の原典ではなく、翻訳を切望するのは決して筋違いではない。それほどに第一級の古典の翻訳の意義は大きいのである。本来不信頼とはいえ、翻訳からでも得ることは実に大きい。

早速、ヴェサリウス『人体構造論抄』を購入して拝読させていただいた。近藤氏の批判もあるが、それにもかかわらずその点を補つて余りある意義があるのではないか。挿し絵の紹介だけでもありがたいが、一六世紀の第一級の医学古典が読める形で書店に電話注文で手に取ることができるのである。訳文があるおかげで図版から想像する以上にヴェサリウスが具体的かつ詳細に観察し記述しているのが判る。一方で、当時においてさえヴェサリウスだけが近代医学への転換点を作つたのではなからう。ヴェサリウスを誕生させた時代、伝統と権威から如何に脱却を計ろうともヴェサリウスですすらも

が呪縛されてしまう時代が現れているのも窺えよう。「The Epitome」自体が医学史の専門書であるばかりか、格好の医学史入門書そのものでもある。

こうなれば『Fabrica』の翻訳が欲しくなる。このような出版を機縁にして我国においても「ヴェサリウス論議」が展開され、近代医学への転換期の解釈に一層の深みが増せば良いと思う。またこのようなことも今回の出版の期待したい意義の一つであろう。訳者も出版社も萎縮しないで、これを機会に古典の紹介が相次いで欲しいものだ。

(永田 和弘)

永富獨嘯庵二三〇回忌追善祭（報告）

平成七年三月二十一日彼岸中日、大阪市天王寺区上之宮町、曹洞宗、藏鷲庵に於て

参列者は、東京より寺師睦宗、同碩甫、西巻明彦、小曾戸明子、名古屋より長与健夫、中村新三、京都より宗田一、杉立義一、小石秀夫、石原理年、渡辺武、地元大阪より裏辻嘉行、柏原紀美、岡村純、松岡道治、山中太木、長門谷洋治、苅込明、南利雄、永井達夫、山田政弥、御坊市より池田曠播氏



永富獨嘯庵墓前にて